

【^{せいねいてんのう}2.2 清寧天皇 ^{かわち、さかとのほらりょう}河内坂門原陵：^{しらが、やま}白髪山古墳】

羽曳野市西浦6丁目

幅20~35mの周濠を巡らす2段造りの前方後円墳で、宮内庁が清寧天皇陵と治定している。

墳丘全長115m、前方部幅128m、後円部径63mと、前方部幅が後円部径の2倍と極端に広がる典型的な6世紀型になっているが、幕末、文久年間(1861~64)の修陵時に、5世紀のシャクシ型から6世紀のパチ型に変形されたことが古絵図により判明し、古市古墳群の大型前方後円墳の終焉を示している。



清寧天皇陵

この陵の主軸東延長線上に“小白髪山古墳”があり、陪塚であるとすれば、形態が前方後円墳である点で注目される。

【^{やまとたけるのみこと}日本武尊 ^{はくちょうりょう}白鳥陵】

羽曳野市軽里3丁目

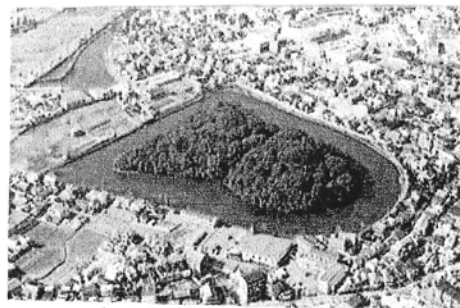
三段造りの前方後円墳で、古市古墳群の南方墳墓群中の最大規模の6世紀型のものである。

俗に前の山古墳とも^{かるさとのおつか}軽里大塚古墳とも呼ばれる古墳の全長は275m、前方部幅160m、後円部径105m、周囲に幅50~70mに及ぶ雄大な周濠を巡らせている。

明治41年に日本武尊の陵に治定された。

しかし尊は“記・紀”の伝承では¹²景行天皇の皇子で、東国の蝦夷・西国の熊襲平定に成功した古代英雄として

評価されているが、歴史考古学上ではその存在が疑問視



日本武尊白鳥陵

されている。もし実在したとしても4世紀初頭~前半の時代と考えられ、陵の築造時代的に見ても200年の年代差があり、規模や形状から見てそれより後の天皇または皇族クラスの墳墓と思われる。

墓と思われる。

羽曳野の語源

“記・紀”に『日本武尊が遠征途中で没した後、白鳥となって伊勢の能褒野と大和の琴弾原を経由してこの古市に飛来した。そして、再び羽を引くようにして埴生野を越えて百舌鳥の方へ飛び去った』と云う記述があり、埴生の丘を「羽曳野→羽曳が丘」と称するようになったと云う。市章も白鳥を抽象図案化したものである。

能褒野、琴弾原にもそれぞれ尊の陵があり併せて『白鳥三陵』としている。その内の琴弾原白鳥陵には、今年11月の古代史散策『掖上②』で訪問する予定。

ふるいちのおおみぞあと
【古市大溝跡】

藤井寺市青山2丁目

昭和39年、古市古墳群の航空写真で羽曳野市の白鳥～軽里～野々上～高鷲～島泉と続く流路跡が発見された。起点は、石川の上流左岸、富田林市の河南橋付近で、現在の大乗川取水口と共通すると見られ、終点は、島泉の辺りで東除川へ注ぐコースがたどられる。

大溝の幅は7.5～8.5m深さは4.4mあり、丘陵地帯の横断には段丘砂礫層を大きく開削して流路を開き、部分的には掘削した土砂を積み上げて堤を築くなど、古代では古墳築造に匹敵する大プロジェクトであった。



古市大溝跡

造られた時期や目的については諸説があり、日本書紀仁徳天皇14年の条に記されている「感玖大溝」に比定する説もあるが、現在では5～7世紀の各時期に築かれたらしいと云う説が信用できるようである。

この大溝は奈良時代には一部埋まり始め、11世紀代には埋没し、部分的にため池として利用されていたのみであった。

- その用途については運河、灌漑用水路の2説があり、
- 運河説…5～6世紀の古墳築造に関わる資材の運搬用として機能し、また水上交通路にも利用した。
 - 灌漑説…古墳築造技術が一定水準に達した時期で、これらの技術や道具を活用して、生活基盤の安定化のための耕作地開拓が進められ、自然流路に加え大きな灌漑用水路の必要が生じた。

大溝の用途・築造時期・流路について決定資料が欠けているが、いずれも国家としての体制を整えての事業であり、築造時期や開発の波及効果などに関連から、大溝の果たした役割は大きいと見られ、今後の発掘調査が待たれる。

